
裏切り = 救い

彼方 ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切りⅡ救い

【Nコード】

N4038R

【作者名】

彼方 ヒロ

【あらすじ】

私は、クリスマスイブに恋人の翔君と会う約束をしていた。

私は、泣いていた。

涙は出ていない。

心が泣いているのだ。

胸が激痛を放っているのがわかる。傷口からドクドクと悲しみの汚水が溢れ出していく。

そんな中、往来の中で立ち尽くす私の肩を、次々と通行人が揺さぶっていった。

私は空を仰ぎ、必死に涙を堪える。

泣いちゃ、駄目なのに。これから彼に会つよ。彼の前では必ず笑ってしようって決めていたじゃない。

私は無理矢理頬に力を入れて、笑顔を作る。

拳を握っている中、粉雪が肩に舞い降りて、吸い込まれるように消えていく。私はふらつきながらも、そっと歩き出した。

夜の帳が空を覆い、けれどそのすぐ下には街の明るい光が瞬いていた。

サンタの格好をした販売員や、街路樹のイルミネーションを見上げる人々、そして、店舗から流れるクリスマスソング。

こんなにも明るい雰囲気か辺りに漂っているのに、私の心はずっと塞ぎ込んだままだった。

笑わなくちゃいけないのに。

私は無理矢理唇の端を持ち上げ、目尻に皺を寄せ、笑ってみせる。そんな中、アーケード通りを抜け、大きなツリーの前まで来て、周囲へ顔を向けて彼の姿を探す。

心が壊れてしまいそうなのに、彼を好きな気持ちだけはずっと変わることはないみたい。彼のことを思うだけで、心が震えてくる。

翔君——彼の名前をそう呼んだその時、長い薄茶色の髪が見え、往来の中から彼の姿が現れる。

彼は淡い微笑みをたたえながら、ゆつくりとこちらへ歩み寄ってきた。

毛皮のついたダウンジャケット、真新しいジーンズ、そして首にはクリーム色のマフラーを巻いていた。

瞳が合った瞬間、彼は微笑み、手を軽く振ってきた。

「翔君」

私がつぶやくと、彼も「望」と返してきて、私達は間近から見つめ合った。

彼はやがて微笑むと、そっと近づいてきて「行こう」と私の手を握り、歩き出す。その体温に、鼓動が早鐘を鳴らし始める。

先ほどの鬱屈した感情が消え、穏やかな気持ちがあふつと湧いてきて、私は彼の腕を両手でぎゅっと握り締める。

けれどその時、目の前を数台のパトカーが通り過ぎていくのが見えた。途端、甘い感情はすぐに消え去った。

脳裏にあの凄惨な光景が蘇りかけ――。

私は彼の腕を握り締め、「翔君」と繰り返した。

「望？」

彼が立ち止まり、私の顔をのぞきこんでくる。肩をつかんで、真正面からじつと見つめてきた。

「どこが悪いのか？」

彼は心配げにそう言う。

私はそんな彼の顔を見つめながら、思う。

――それは翔君が、×××だからだよ。

私の小さなつぶやきは聞こえなかったらしく、彼は苦々しく笑うと、

「せっかくのクリスマススイブなんだし、今日は望の行きたい場所に行こう。どこがいい？」

屈み込んで、私と視線を合わせて聞いてくる。

「……大岩公園」

彼と初めてデートした場所。あそこなら、この気持ちを落ち着か

せることができるかもしれない。けれど、

「そこは……駄目だ」

彼は険しい顔で言う。

「その場所以外で頼むよ」

彼はそう言つてすぐに表情を笑顔に作り変えると、私の腕を引いて歩き出し、近くの喫茶店へと促した。

彼がオーダーをしている最中、私はずっと彼の服裾を握つて震えていた。そんな私の様子に気付いて、彼が何度も気遣うように見えてきて、「望」と声をかけてくれた。徐々に心が落ち着いていく。

オーダーが済むと、彼は「行こうか」と店の奥へと進んでいった。私もその後につき、二人で窓際の席へと座る。

私は大きく息を吸つて、気持ちを落ち着かせる。すると、彼は私の手をそつと握り、「冷たい手してる」と両手でそれを包み込んでくれた。

「ありがとう」

彼の心遣いに、私の顔もようやく綻んでいく。

彼は私のカップにミルクを入れて、「飲んで」と差し出してきた。受け取つて一口飲んでいる間、ずっと彼は様子を見守つてくれていた。

「おいしい」

私が微笑むと、ようやく彼は安堵した顔を浮べる。

「笑つてくれてよかった。望を見ると、不味いものもおいしくなるんだ」

彼はそう言つてコーヒーをすすり、笑う。

本当に、彼の優しさが今の私の心を崖際で繋ぎ止めてくれているんだと心底実感する。

私達は片手を繋ぎ合わせたまま、お互いの表情を見守りながらコーヒーを飲んだ。

「笑つてくれてよかった」

「せっかくのクリスマスだし、翔君は何か欲しいものある？　でき

る限り、なんでも買ってあげるよ」

すると、彼は「本当になんでもいいの？」と言って可笑しげに笑う。

「無理しないでいいよ。僕は別に欲しいものはないから」

彼はそう言っ、ふと窓の外に視線を向けた。どこか遠い目でその景色を見つめていた。

「欲しいものならもう手に入れた」

欲しいもの？ と私は聞く。

「心からやりたいことが見つかったんだ。それをやっている時だけは、幸せな気持ちでいられる。その瞬間だけは本当の自分であるから」

彼はそう言っ、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「そう……」

何故か私は彼の顔を見つめているうちに、背筋が冷たくなるのを感じた。どうしてだろう。

「そろそろ行こうか」

彼はそう言っ立ち上がる。

私はうなずきながら、どうしても彼のその、含みのある笑顔から目が離せなかった。

勘定を済ませ、彼と手を繋ぎながら外へと出る。彼は「少し見て回ろう」と言ってゆっくりとアーケード通りを歩き出す。

アクセサリーショップや洋服店などを巡っていると、ふと彼の手が小刻みに震えていることに気づいた。振り向くと、彼はどこか充血した目を四方へ向けて、落ち着かない様子で周囲を見渡している。

「翔君？」

彼は私の言葉には気づかず、人込みに向かって歩き出した。咄嗟に彼の腕をつかむと、思い切り払われる。その瞬間、

「……×りたい」

彼が低い声でそうつぶやいた。

「×りたい。……×りたい、×りたい、×りたい」

彼は、ぶつぶつとつぶやき始める。

私は呆然と彼の横顔を見つめ、その瞬間、彼はガツと私の手首をつかんできた。私は悲鳴を上げて、彼の手を振りほどこうとする。

「×りたいんだ、望」

私は彼のキラキラ光る瞳を見て、思わず声を失う。

「どうしたの？ …… ねえ、」

腕を揺さぶって問いかけると、彼は「×りたい、×りたい」と繰り返すだけだ。

私はその瞬間、彼を抱き寄せていた。彼の肩がびくんと震える。

「…… 大丈夫だから。私はここにいるよ」

私は彼の耳元でそう囁き、ゆっくりと彼の背中をさすってあげた。

「…… のぞ、み」

「ずっと一緒だから」

腕に彼の震えが伝わってくる。けれど、それは徐々に小さくなっていき、程なくして途絶えた。

「…… 望。僕は、」

「何も言わなくていいよ」

彼は弱い力で抱き返してくる。

やがて私達はゆっくりと体を離すと、まっすぐ見つめ合う。彼の瞳は濡れていた。

「翔君は疲れてるんだよ。少し休んだ方がいいわ」

私は彼の肩を支えて、そっとベンチに座らせる。そして、しゃがみ込んで、顔を近づけて囁いた。

「家族に電話してくるから」

私は彼の手の甲を叩いてベンチを離れ、携帯を取り出した。そして、電話をかける。

二言三言伝えて、すぐに電話を切った。もう一度彼の方を見る――目が合った。

ゆっくり近づきながら、そっとポケットに手を入れ、それをつかむ。そして、

「翔君に会えてよかった。これからもあなたを好きでい続けるよ」
彼は私の突然の言葉に、きょとんとする。

「翔君。本当に好きだよ——」

そう言つて、ポケットから手を引き抜き――。

銀色の軌跡が閃き、ザク、と音がする。彼が呻き声を上げて、横向きに倒れた。

私はナイフで彼の顔を切りつけていた。

彼は顔を抑えながら私を見て、「のぞ、み……」とつぶやく。私はくすりと微笑み、

「これは私からの、精一杯の罰だよ」

そう言つてもう一度ナイフを振りかざそうとすると、「やめろ！」と背後から数人の男が飛びかかってきた。私はあつという間に男達に押さえつけられる。私は必死に顔を上げて、驚愕の目で見つめる彼を見やつて、

「翔君……精一杯生きてね」

それだけをつぶやいて、体の力を抜き、地面に組み伏せられることを許した。頭上から、「通り魔を確保したぞ！」という叫びが降ってくる。

私は、男達の汗まみれの指で、頭蓋骨や肩を締め付けられながら、思う。……これでよかったんだよね。

今日、私はデートの待ち合わせ場所まで早く来てしまった。

一分一秒も早く彼と会いたくて、気付けば足がそこに向かつてしまつていたのだ。しかし、待つことに痺れを切らし、私は彼を家まで迎えに行くことにした。

最近大岩公園で通り魔が出たばかりで、人気のない住宅街の道を歩くことに躊躇いはあつたけれど、その時私は本当に浮かれていて、些細なことを気にする余裕はなかった。

そんな中、狭い路地を歩く彼の姿を見つけたのだ。私は思わずはしゃぎながら、彼へと駆け寄ろうとした。

しかしその瞬間、彼はそつとポケットから手を出し――。
そして、鈍く光り輝く刃が歩行者の女性の首筋をえぐった。その
光景に、私は目を見開いた。

彼は恍惚とした表情を浮かべながら、倒れ伏した彼女をじつと見
つめて、小刻みに肩を震わせて笑っている。

私は一步、また一步と後ずさつていく。……こんな嘘だよ。で
も、そこにいるのは間違いなく彼で――。

私は何か言葉にならない悲鳴を上げながら、涙を散らせて走り続
けた。

……翔君。……翔君。

――そして、私はナイフをそつと強く握り締める。

街頭の光を弾き返すそれには、翔君の血の他にも、誰かの血がべ
つとりとこびりついていた。

彼を抱きしめた時に、ポケットからそつと抜き取ったナイフ。

警察を呼びつけたのも私だ。電話で犯人が私であることを自供し、
居場所を伝えた。

世界は「犯人」を翔君から私へ切り替える。そして、彼の指紋を
消し去る為に、私は――。

刃を、そつと自分の首筋に突き立てる。

ナイフが肌を抉り、その柄は私の血によって洗い流される。最後
に、彼の絶叫する姿だけが見えた。

翔君……大好きだよ。

彼の顔を見ながら死ぬるなら、それだけでもう十分だ。

他でもない、彼の為に。私のすべてを、あなたの為だけに――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4038r/>

裏切り = 救い

2011年11月15日15時01分発行